

# セメント樽の中の手紙

葉山嘉樹

青空文庫



松戸与三はセメントあけをやつていた。外の部分は大して目立たなかつたけれど、頭の毛と、鼻の下は、セメントで灰色に蔽おほわれていた。彼は鼻の穴に指を突つ込んで、鉄筋コンクリートのように、鼻毛をしゃちこぼらせている、コンクリートを除とりたかつたのだが一分間に十才ずつ吐き出す、コンクリートミキサーに、間に合わせるためには、とても指を鼻の穴に持つて行く間はなかつた。

彼は鼻の穴を気にしながら遂とうとう々々十一時間、——その間に昼飯と三時休みと二度だけ休みがあつたんだが、昼の時は腹の空すいてる為めに、も一つはミキサーを掃除していて暇がなかつたため、遂とうとう々々鼻にまで手が届かなかつた——の間、鼻を掃除しなかつた。彼の鼻は石膏細工の鼻のように硬化したようだった。

彼が仕舞しまい時分に、ヘトヘトになつた手で移した、セメントの樽たるから小さな木の箱が出た。「何だろう？」と彼はちよつと不審に思ったが、そんなものに構ますつて居られなかつた。彼はシャヴルで、セメント柵ますにセメントを量はかり込んだ。そして柵ますから舟へセメントを空けると又すぐその樽を空けにかかつた。

「だが待てよ。セメント樽から箱が出るつて法はねえぞ」

彼は小箱を拾つて、腹かけの井の中へ投げ込んだ。箱は軽かった。

「軽い処を見ると、金も入っていねえようだな」

彼は、考える間もなく次の樽を空け、次の枿を量らねばならなかった。

ミキサーはやがて空廻りを始めた。コンクリがすんで終業時間になった。

彼は、ミキサーに引いてあるゴムホースの水で、一と先ず顔や手を洗った。そして弁当箱を首に巻きつけて、一杯飲んで食うことを専門に考えながら、彼の長屋へ帰って行つた。発電所は八分通り出来上つていた。夕暗に聳える恵那山は真つ白に雪を被つていた。汗ばんだ体は、急に凍えるように冷たさを感じ始めた。彼の通る足下では木曾川の水が白く泡を囁んで、吠えていた。

「チエツ！ やり切れねえなあ、嬢は又腹を膨らかしやがったし、……」彼はウヨウヨしている子供のことや、又此寒さを目がけて産れる子供のことや、滅茶苦茶に産む嬢の事を考えると、全くがっかりしてしまつた。

「一円九十銭の日当の中から、日に、五十銭の米を二升食われて、九十銭で着たり、住んだり、饅棒奴！ どうして飲めるんだい！」

が、フト彼は井の中にある小箱の事を思い出した。彼は箱についてるセメントを、ズボ

ンの尻でこすつた。

箱には何にも書いてなかつた。そのくせ、頑丈がんじょうに釘づけしてあつた。

「思わせ振りしやがらあ、釘づけなんぞにしやがつて」

彼は石の上へ箱を打ぶつ付けた。が、壊われなかつたので、此の世の中でも踏みつぶす気になつて、自棄やけに踏みつけた。

彼が拾つた小箱の中からは、ボロに包んだ紙切れが出た。それにはこう書いてあつた。

——私はNセメント会社の、セメント袋を縫う女工です。私の恋人は破砕器クラツシヤーへ石を入れることを仕事にしています。そして十月の七日の朝、大きな石を入れる時に、その石と一緒に、クラツシヤーの中へ嵌はまりました。

仲間の人たちは、助け出そうとしましたけれど、水の中へ溺おぼれるように、石の下へ私の恋人は沈んで行きました。そして、石と恋人の体とは碎け合つて、赤い細い石になつて、ベルトの上へ落ちました。ベルトは粉砕筒ふんさいとうへ入つて行きました。そこで鋼鉄の弾丸と一緒にこまかな細く細く、はげしい音に呪のろいの声を叫びながら、碎かれました。そうして焼かれて、立派にセメントとなりました。

骨も、肉も、魂も、粉々になりました。私の恋人の一切はセメントになってしまいました。残ったものはこの仕事着のボロ許りばかです。私は恋人を入れる袋を縫っています。

私の恋人はセメントになりました。私はその次の日、この手紙を書いて此樽の中へ、そうと仕舞い込みました。

あなたは労働者ですか、あなたが労働者だったら、私を可哀相かわいそうだと思つて、お返事下さい。

此樽の中のセメントは何に使われましたでしょうか、私はそれが知りとう御座います。私の恋人は幾樽のセメントになったでしょうか、そしてどんなに方々へ使われるのでしょうか。あなたは左官屋さんですか、それとも建築屋さんですか。

私は私の恋人が、劇場の廊下になったり、大きな邸宅の塀へいになったりするのを見るに忍びません。ですけれどそれをどうして私に止めることができましょう！ あなたが、若し労働者だったら、此セメントを、そんな処に使わないで下さい。

いいえ、ようございます、どんな処にでも使つて下さい。私の恋人は、どんな処に埋められても、その処々によつてきつといい事をします。構いませんわ、あの人は気象きしょうの確しつかりした人ですから、きつとそれ相当な働きをしますわ。

あの人は優しい、いい人でしたわ。そして確かりした男らしい人でしたわ。未だ若うございました。二十六になった許りでした。あの人はどんなに私を可愛がって呉れたか知れませんでした。それなのに、私はあの人に経帷布きょうかたびらを着せる代りに、セメント袋を着せているのですわ！ あの人は棺かんに入らないで回轉窯かいてんがまの中へ入ってしまったわ。

私はどうして、あの人を送って行きましょう。あの方は西へも東へも、遠くにも近くにも葬ほうむられているのですもの。

あなたが、若し労働者だったら、私にお返事下さいね。その代り、私の恋人の着ていた仕事着の裂き裂を、あなたに上げます。この手紙を包んであるのがそうなのですよ。この裂には石の粉と、あの方の汗とが浸しみ込んでいます。あの方が、この裂の仕事着で、どんなに固く私を抱いて呉れたことでしょう。

お願いですからね。此セメントを使った月日と、それから委くわしい所書と、どんな場所へ使ったかと、それにあなたのお名前も、御迷惑でなかつたら、是非々々お知らせ下さいね。あなたも御用心なさいませ。さようなら。

松戸与三は、湧わきかえるような、子供たちの騒さわぎを身の廻りに覚えた。

彼は手紙の終りにある住所と名前を見ながら、茶碗に注いであつた酒をぐつと一息に呻あおつた。

「へべれけに酔つ払いてえなあ。そうして何もかも打ち壊して見てえなあ」と怒鳴つた。  
「へべれけになつて暴あばれられて堪たまるもんですか、子供たちをどうします」

細君がそう云つた。

彼は、細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。

(大正十五年一月)



# 青空文庫情報

底本：「全集・現代文学の発見・第一巻 最初の衝撃」学芸書林

1968（昭和43）年9月10日第1刷発行

入力：山根鋭二

校正：かとうかおり

1998年10月3日公開

2006年2月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# セメント樽の中の手紙

葉山嘉樹

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>